



公益社団法人 茨城県農林振興公社
穀物改良部
〒311-4203 水戸市上国井町3118-1
TEL 029-239-6300 FAX 029-239-6880
http://www.ibanourin.or.jp

1. 理事長年頭のごあいさつ



公益社団法人
茨城県農林振興公社
理事長 **中村 直紀**

あけましておめでとうございます。

皆様方におかれましては、健やかな新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年9月関東・東北豪雨による河川の氾濫等で、県西地域を中心に農作物や農業施設に未曾有の災害をもたらしました。被害に遭われた方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、1日も早い復興を願うところであります。

農林業を取り巻く状況は、農林業従事者の高齢化の一層の進行、担い手不足の深刻化、耕作放棄地の増加、資材価格の上昇により経営コストの上昇など、依然として厳しい状況におかれています。さらに、TPP交渉が大筋合意したことで、輸入農産物の関税撤廃や削減等により厳しい競争にさらされることになり、本県農林業に与える影響が懸念されております。

当公社は平成26年4月に、農業関係3団体が統合し、「公益社団法人茨城県農林振興公社」としてスタートしました。新公社は、県行政を補完し、

あるいは一翼を担う立場から、農業生産の基盤である農地の利用集積、農業担い手の確保・育成、農業農村の振興支援、林業・緑化事業、主要農作物等種子の需給調整、主要農作物原種の生産、園芸農業の振興などを積極的に推進しております。

さて、平成25年度から本格的に生産が開始されました茨城県オリジナル水稲品種「ふくまる」につきましては、一般栽培が始まり3カ年が経過、大粒で外観品質に優れ、食味も良好なことから実需者から高い評価を得ております。平成28年産からは、これまで試験的に実施していた「生産者登録制度」を本格的に導入し、品質の安定化等に必要な一定の要件に同意していただいた生産者に限定して作付けを推進し、流通する「ふくまる」の品質安定化を図り、実需者からの評価が一層高まることが期待されます。

県オリジナル品種の平成27年産の作付面積は「ふくまる」が627ヘクタール、鹿行や県南地域の早場米地域を中心に作付けされている早生品種の「一番星」は109ヘクタールまで普及拡大し、当公社も種子の安定供給が図られるよう体制を整えております。

最後に、本年も事業目標の達成に向けて全力を挙げてまいりますので、関係各位のさらなるご支援とご協力お願い申し上げますとともに、皆様方の益々のご発展とご健勝をお祈り申し上げまして、年頭のご挨拶といたします。

も く じ

1. 理事長年頭のごあいさつ	1
2. 平成27年産水稲の作柄と平成28年産に向けた対策について	2
3. 本県における「雑草イネ」の発生と効果的な防除法について	4
4. スプリングフェア開催について	6
5. がんばる種子生産者！(JA常陸 太田地区種子生産部会)	7
6. 穀物改良部ニュース	8
(1) 平成27年産大豆・そば種子標準見本品作成会で“里のほほえみ”調整	
(2) 落花生掘り取り体験開催される	
(3) 第4回「そば打ち体験教室」開催される	

2. 平成27年産水稻の作柄と 平成28年産に向けた対策について

農業総合センター専門技術指導員室 眞部 徹

・平成27年産の気象と作柄状況

平成27年産水稻は、長雨の影響でなかなか収穫が進まなかったことが印象に残っているかと思いますが、平成27年の気象は水稻栽培において大変厳しいものでした(図1、図2)。田植期以降、平年に比べかなり高温・多照で推移し旺盛な生育を示していました。しかし7月上旬の低温による稔実低下や、8月上旬の高温及び中旬以降の日照不足と多雨により粒の充実が抑制され、県全体の作況指数は96(県北102、鹿行及び県南100、県西86:12月4日公表、農林水産省)の「やや不良」(県西については水害の影響が大きい)となりました。うるち米の1等米比率は84.8%(平成27年10月31日現在、農林水産省速報値)で、主な落等要因は、白未熟粒、カメムシ類による斑点米及び長雨の影響による穂発芽粒によるものでした。

・27年産の病害虫発生状況と 28年産の対策

1. いもち病

6月末～7月上旬の多雨、低日照により7月1～10日の間に、葉いもち病の感染好適日が県内の広範囲で高頻度に認められました(病害虫速報NO.5:県病害虫防除所、平成27年7月14日発表)。その後天候が一変し高温・多照に転じ、葉いもち病の進展は抑制されましたが、葉いもちの防除を行っていない圃場については、いもちの菌密度が高く出穂後登熟期間中の低日照・多雨により穂いもち病、特に枝梗いもちが散見されました。穂首いもちは、穂首からいもち病菌が侵入し、穂全体

が枯れあがるため発見することが容易ですが、枝梗いもちは、穂の枝である枝梗から侵入するため注意して観察しないと、成熟による黄化と区別することが困難です。穂首いもち同様、感染部位から先が枯れてしまいますので、強制登熟により登熟不良となり千粒重の低下につながりますので、注意が必要です。

種子生産においては、良く充実した優良な籾を生産する必要があるため、穂いもちの発生につながる葉いもち病の防除が肝心です。出穂後の防除も必要ですが、近年の気象変動を考慮すると、常発地以外においても育苗箱施薬が効果的です。また、出穂前の予防的防除も高い効果を示します。

2. 稲こうじ病

稲こうじ病(写真1)は、種子の外観品質を著しく低下させる病害で本県においても近年増加傾向にあり、また全国的にも問題になっています。平成27年の気象は、出穂前の穂ばらみ期ごろに降雨が多かったことから、稲こうじ病の発生が多く見られました。本病害の防除については、出穂20～10日前の銅剤散布が最も効果があります。しかし、この時期は梅雨に当たるため梅雨の晴れ間をねらって防除しなければなりません。防除適期が短いことから幼穂長を確認し出穂15日前を



写真1 稲こうじ病

防除予定日とし、天候を見ながら適期に防除を行って下さい。前作に本病の発生が多く見られた圃場については伝染源（厚壁孢子）が土壌に多く残っているため、次作に発生しやすくなりますので注意が必要です。

3. イネ縞葉枯病

イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病で平成 27 年 9～10 月の県内 75 地点のヒコバエにおける発生状況調査（病害虫速報 NO. 6：県病害虫防除所、平成 27 年 10 月 30 日発表）によると、鹿行地域の 2 地点を除くすべての地点で発生を確認しています。平均発病株率は県西地域が最も高く、次いで県南、県央、県北、鹿行の順となっています。県南地域での発病株率が高まっていますので注意が必要です。これから

できる防除対策としては、本病を媒介するヒメトビウンカは、畦畔等のイネ科雑草で越冬するため、雑草管理を徹底します。次作では育苗箱施薬を利用し 6 月上旬に本田に飛来するヒメトビウンカの防除を行います。さらに、28 年産収穫後は、速やかに耕起しウンカの生息地となるヒコバエの発生を防ぎます。

4. 異常気象に負けない稲作り

近年の気象においては夏の高温傾向が続いていますが、27 年の様に低温や低日照及び豪雨など激しい変動が起こるリスクが増えています。この対策においては、言い古されていますが「健全な稲作り」以外他なりません。土づくり、15cm の深耕や間断かんがいなど基本技術をもう一度確認し、異常気象に負けない稲作りをお願い致します。

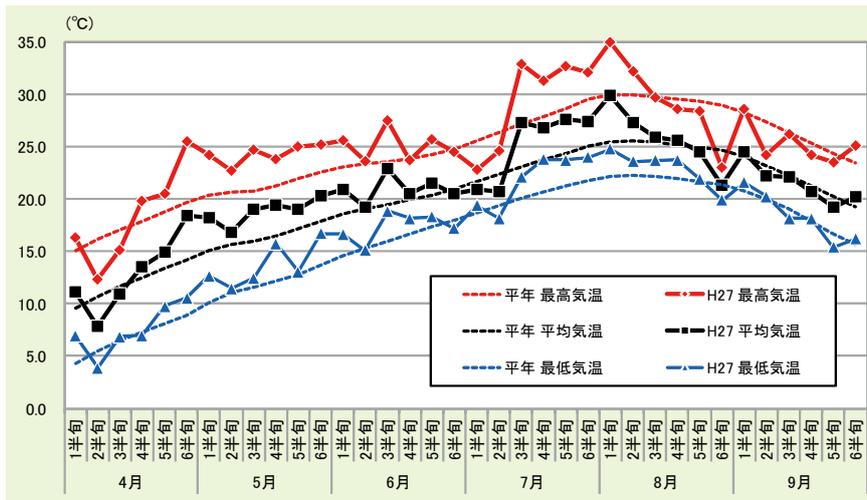


図 1 気温の推移（水戸アメダス）

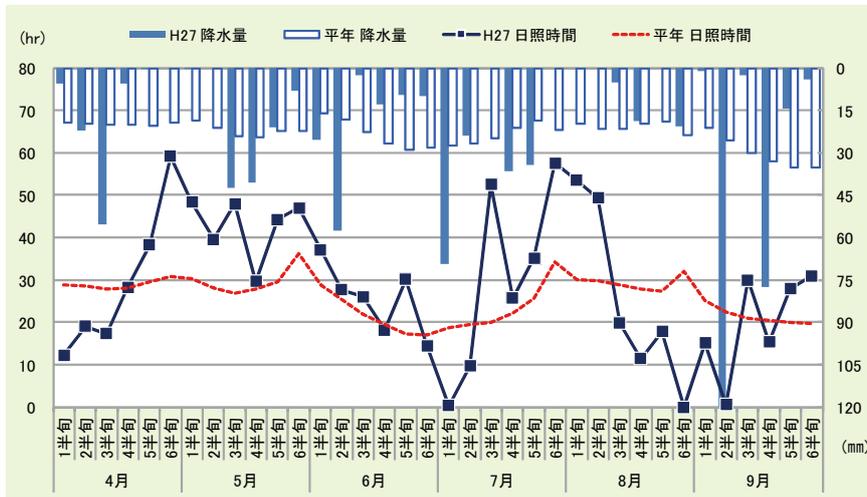


図 2 降水量と日照時間の推移（水戸アメダス）

3. 本県における「雑草イネ」の発生と効果的な防除法について

農業総合センター農業研究所 油谷百合子

雑草イネは、栽培イネと同じ植物種ですが、玄米が赤いものが多く、脱粒しやすいため、収穫物に赤米混入被害をもたらす水田雑草です。以前から県西・県南地域で発生が問題になっていましたが、最近では県内全域での発生が確認されています。玄米に混じると農産物検査で着色粒として扱われ、着色粒率が0.1%以上で2等、0.3%以上で3等、0.7%以上で規格外となるため、多発生した場合、経営に及ぼす被害は深刻です。

さまざまな雑草イネ

一口に雑草イネといっても、様々なタイプがあります(写真1)。国内で分類された雑草イネは現在9タイプほどありますが、本県では、それ以外の雑草イネも複数種類確認されています。種類によって、草丈や出穂期、芒の有無やふ先の色、玄米色などの形質が異なりますが、どれも初が非

常に落ちやすい特徴は共通しています。

近年では、「コシヒカリ」と草姿・出穂期がよく似ており、玄米色でしか見分けのつかない雑草イネも現れています。雑草イネが圃場に生えているか確認するためには、いろいろなタイプの雑草イネが存在することを認識していることが重要となります。

早期の防除が大切です

雑草イネの発生に気がつくのが遅れた場合や、対策を講じずに放置した場合、3～4年で発生量が激増する恐れがあるので、収穫した玄米に赤米が混じていたら、ただちに防除対策を行ってください。防除は、以下の3つを組み合わせると大きな効果が得られることが、現地試験の結果から明らかになりました。なお、雑草イネの種類によらず対策は同じです。

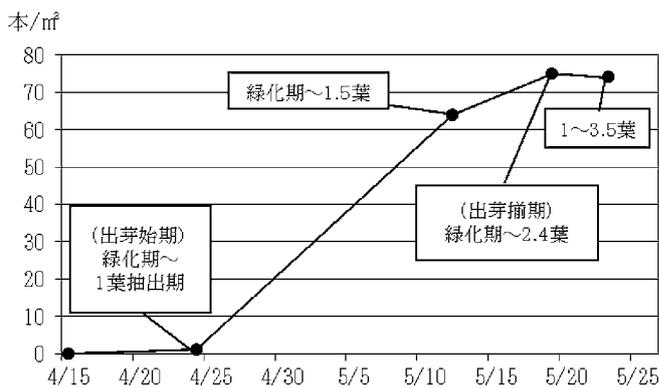


図1 雑草イネの出芽数及び葉齢の推移



(写真1) さまざまな雑草イネの玄米
中央農業総合研究センター作成
「雑草イネまん延防止マニュアル」より



(写真 2) 代かきによる雑草イネ防除の様子

(左) 入水直前の圃場における雑草イネ発生の様子 (5 月下旬)

(右) 代かきによる雑草イネ埋土の様子

(写真上部は代かき前の田面、写真下部は代かき後の田面)

対策 1 5 月下旬以降の代かき・移植

本県では雑草イネの発生は 4 月下旬頃から始まり、概ね 5 月下旬に出芽が揃います (図 1)。出芽揃い後まで代かきを遅らせることで、雑草イネを土中に埋没させることができます (写真 2)。平成 26 年度の現地試験では、土中種子のうち概ね 8 割が 5 月下旬までに発芽し、その大部分が代かきで死滅しました。代かきは丁寧に 2 回行い、雑草イネを埋没させてください。

対策 2 除草剤を 3 回体系処理

移植後は、雑草イネに効果の高い除草剤を選んで適切な時期に使います。雑草イネに効果のある剤は、(公財)日本植物調節剤研究協会 HP に掲載されていますので、参考にしてください。

有効な剤であっても防除できるのは雑草イネの出芽前まで (剤によっては出芽始まで) の時期だけです。緑化が始まり 1 葉期を過ぎると除草剤での防除はできません。

雑草イネは長期間にわたって発生するので、除草剤効果の切れ間がないように、初期剤、一発処理剤、中期剤の 3 剤による体系処理を行います。処理時期は、初期剤を移植時～移植翌日、一発処理剤を移植 7～10 日後、中期剤を移植 14～20 日後とします。除草剤処理の間隔が 10 日を超えないように注意してください。また、除草期間内は常時湛水し、除草剤の効果を低下させないように

にしてください。

対策 3 雑草イネを発見しやすい栽培品種を選ぶ

上記 1、2 の対策でも防除しきれずに残った雑草イネは手取りで除草する必要がありますが、栽培品種と雑草イネの外観が似ていると抜き取りが困難です。そのため、防除対象の雑草イネと、稈長・出穂期が異なる品種を選んで栽培すると、雑草イネを発見しやすくなります。雑草イネの初は出穂から 14 日後には脱粒し始めるので、発見したら初が落ちる前に手取り除草をしてください。穂や根もとを刈り取っても遅れ穂が発生するため、株ごと抜き取ります。抜き取った株は、可能であれば焼却処分してください。

3 年程度の継続防除を

色彩選別機で赤米を取り除いても、水田の雑草イネが減るわけではありません。圃場での防除が基本となりますので、雑草イネの種子の寿命とされる 3 年程度は防除を継続して下さい。その他の対策として、水稻収穫後の秋起こしをしないことで、こぼれた種子を冬の低温や鳥の捕食によって減少させる方法もあります。さらに、可能であれば大豆などの畑作物に転換し、イネ科雑草用除草剤や中耕で防除することも効果的です。防除に関しては、地域の農業改良普及センターまたは農業総合センター、農業研究所へご相談ください。

4. スプリングフェア開催について

JA全農いばらきでは毎年3月第1土曜・日曜日に春期JAグループ茨城農機・生産資材展示会「スプリングフェア」を行っています。スプリングフェアはダイナミックフェアに並ぶ大展示会です。昨年開催したスプリングフェア2015は農業機械メーカーをはじめ40社を超える企業団体が出展し、約4000名の生産農家にご来場いただきました。会場内では100馬力を超える大型トラクタから刈払機まで大小さまざまな農業機械や自動車、生産資材を展示しており、品ぞろえの豊富さがスプリングフェアの魅力です。

また、スプリングフェアでは中古農機展示即売会を同時開催しています。この中古展は県内JAから出品された中古農業機械を展示し、開催初日の11時に購入者を抽選で決定しています。昨年のスプリングフェアでは74台の出品があり、35台が成約となりました。従来は整備された中古農機のみを展示・販売していましたが、次のスプリ

全国農業協同組合連合会 茨城県本部生産資材部

ングフェア2016では現状渡しのお買い得品コーナーを設置し、さらに手軽に中古農機を購入できるようにする予定です。

そして、開催期間中はミニ講習会を開催しています。ミニ講習会では農家の方々に向けて無料でお得な情報を15分程度でお伝えしています。定員は各回先着30名です。

昨年は「クボタメンテナンス情報」や「爪の摩擦でわかる車速・PTO軸の回転速度」の講習が大好評でした。そのほか、健康や農機の盗難予防コーナーの設置も予定しており、営農と生活全体をバックアップする体制を整えています。

さらに、「クイズラリー」の開催も予定していますので、ご家族で来場されるお客様もお楽しみいただけます。

今春もスプリングフェアを開催いたしますので、皆様ご来場のほどよろしく願いいたします。

スプリングフェアに関する情報は随時JA全農いばらきホームページに掲載しています。

URL:http://www.ib.zennoh.or.jp/contents/make/nouki_event.html



昨年のミニ講習会はたくさんの方に参加していただきました



メーカーの方の熱心な説明にみなさん聞き入っています

5. がんばる種子生産者！



JA 常陸 太田地区種子生産部会
部会長 岡崎 欣一さん

種子生産規模

- ・常陸秋そば
- 部会受託面積 28.2ha
- 内 25a 栽培

◆品質向上の取り組み

平成 26 年 2 月より種子生産部会（平成 27 年度 55 名）部会長を務め、常陸秋そばの品質向上と安定生産に向け、部会員と協力しながら栽培を行っております。

具体的には、そばの刈取り後に小麦等を栽培し、緑肥として青刈り・すき込みを行い、土壌の地力増進を図るとともに、JA や普及センター、農林振興公社等の関係機関にご協力を頂き、定期的な講習会や圃場審査を行い、優良種子の栽培に努めております。

また、刈取り後は品質の安定・向上の為、生産者段階で一度調整を行ったのち、再度 JA のライスセンターで調整を行っています。そして、最後の一袋毎、種子検査を行い品質の確認を行っています。

◆栽培管理

そばは夏場播種の為、降雨が発芽に影響します。日照りが続くと発芽がばらついたり、夕立や台風等が発芽前に来ると種子が流されたり、発芽前に腐ってしまったということがあるので、播

種前は、天気予報や過去の播種日等を加味し播種日を選定します。

発芽後の管理については、作付から収穫までが他の作物と比べ短い作物であること、天候に大きく左右される事から、常に気を遣いながら栽培を行っています。

中耕・培土等を行い雑草の除去や排水対策を行い、倒伏抑制や異種穀粒が入らないように心がけております。また、山間地ということで、例年獣害対策を実施し圃場を荒らされないよう、電牧柵などの対策を行いながら、栽培を行っています。

◆今後の抱負

そばについては、政策や天候により市場が大きく乱高下する情勢が続いています。そのような中で、私たちの栽培した種子が県下で常陸秋そばの品質やブランドの向上へ寄与しているとの自覚のもと、優良種子の生産に努めていきます。



花盛りのそば畑



そば選別用唐箕（とうみ）

6. 穀物改良ニュース

(1) 平成27年産大豆・そば種子標準見本品作成会で”里のほほえみ調整

12月4日、公益社団法人茨城県農林振興公社主催の、平成27年産大豆・そば種子標準見本品作成会が開催されました。本年より販売が開始される大粒大豆種子“里のほほえみ”を手に取りながら「粒がおおきいな」、「タチナガハとは色目が違うな」などの感想が聞かれました。



大豆“里のほほえみ”標準見本品作成の様子

(2) 落花生掘り取り体験教室開催される

県中部落花生組合（会長 久松一好）は10月2日、かすみがうら市下稲吉小学校5年生109名、保護者100名など約232人による「落花生の掘り取り体験」を開催しました。この校外学習は、今

年で12回を迎える恒例行事であり、天候に恵まれた圃場のあちことから子供達の賑やかな歓声が聞こえました。収穫した落花生はその場でゆでられ、お話の後、風味豊かな「ゆで落花生」を」全員で賞味しました。



初めての落花生掘り取り体験



子供達に落花生の不思議なお話

(3) 第4回「そば打ち体験教室」開催される

去る11月27日、常陸秋そば振興協議会は、茨城の誇る「常陸秋そば」の魅力をたくさんの人に知って貰うため、「そば打ち体験教室」を開催しました。」

今回は茨城県消費者団体連絡会の皆さんが常陸秋そば発祥の地「常陸太田市赤土」の“そば工房”でそば打ちにチャレンジしました。

そば打ちの経験の無い方がほとんどでしたが、熱心にそばを打たれ、自分の打ったそばを食べた感想は、「とってもおいしかった」と全員満足の様子でした。



皆真剣です（そば打ちの様子）